

論 文

「子ども理解を促す観察記録の取り方」指導後の成果について  
—学生の意識の変化に着目して—

櫻井京子

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(令和2年1月24日受理)

**Results of Teaching a Method for Recording Observations that Promotes  
the Understanding of Children  
—Focusing on the Changes in Students' Awareness—**

Kyoko SAKURAI

*(Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University)*

(Accepted January 24, 2020)

**Abstract**

In the 10th issue of the Journal of Children's Studies, the author elucidated the importance of keeping records and making evaluations in childcare. Childcare workers and facilities need to reflect on the childcare they provide from the two perspectives of how children are raised and optimal childcare and make evaluations based on their records. With this point in mind, the author has been providing practical training on a method of recording observations that promotes teachers' understanding of the children in their class. This paper will further examine and verify the results of ongoing research with regard to the result of the training.

Keyword : Observational records 観察記録  
Practice records 実践記録  
Understanding children 子ども理解

## 1. はじめに

平成30年4月から、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園教育・保育要領」の3法令が同時改訂・施行された。どの施設にあっても「質の高い幼児教育・保育をめざす」ことを目標に保育現場ではさまざまな努力のもと、保育が行われている。

このように大きな転換期を迎えた幼児教育・保育においては、保育者に期待される役割やニーズも多様化し、それらに柔軟に対応することができるような保育者、つまり保育者の質の担保がより求められるようになった。そのためにはまず、保育者自身が多忙な日常の保育の中にあっても、自らの保育を振り返り、検証し、課題については改善して次に活かすことが肝要である。

子ども学部紀要第10号(2019)<sup>1)</sup>で、筆者は「評価」のマネジメントサイクルを作成することによって、幼稚園・保育所・こども園等の保育現場で勤務する保育者が具体的、詳細な日々の保育記録を作成し、それに基づいた評価と改善を行うことが重要であることを示した。保育者は、各施設の教育・保育の根幹である「教育課程」「保育課程」を基盤として、「育ってほしい子どもの姿」をイメージしながら具体的な指導計画を立案し、実際に保育を行う。実践した保育については自ら「記録」に収め、振り返りをしながら問題点や課題を抽出し、その改善方法を探る(自己評価)。さらに、その情報については保育者を中心とした協働する全職員、つまり施設内で研修やカンファレンス等の機会を利用して共有し、施設全体での「評価」に繋げていく。このような過程を経て、保育内容はさらに改善され充実したものになり、「教育課程」や「保育課程」は再構築されるのである。このように、保育における「記録」と「評価」は非常に重要である。さらに、保育者や保育施設が保育について評価を行う際には、大別すると2つの視点に分けられることが明らかになった。1つ目は「子どもの育ち」の視点であり、2つ目は「保育者の保育のあり方」という視点である。

これらを踏まえ筆者は、学生に対して行った「観察記録・実践記録の取り方」の指導について、3歳児・4歳児・5歳児の3回にわたって学生が書いた実際の記録を紹介し、その変化の過程や成果を報告した。その際に今後の課題として、学生自身の学びの評価について検討することを掲げていた。

そこで筆者は「子ども理解を促す観察記録の取り方」指導後の成果について確認するため、学生に対して授業直後から実習直後の約1年にわたる継続的な調査を行った。本論文では、その間の学生の意識の変化に着目し、結果について検証することを目的とするとともに、今後の実習指導の一助としたい。

## 2. 「観察記録・実践記録の取り方」指導

### 1) 取り組みの概要

#### ①対象学生

子ども学部子ども学科1年生92名

#### ②実施時期(指導)

平成29年12月～3週連続

#### ③実施授業

保育内容総論

#### ④観察の対象

視聴覚教材DVD「実践に学ぶ幼児の保育」

社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会

日本子ども家庭総合研究所 監修(2000)

「第1巻 3歳を中心に」

「第2巻 4歳を中心に」

「第3巻 5歳を中心に」

観察の対象としたものは、それぞれが30分程度の保育の様子を撮影したビデオである。

#### ⑤記録方法

「保育の観察記録」～「保育の実践記録」

※1 参照

※2 参照

### 2) 指導の具体的な流れ

#### ①1週目「第1巻 3歳を中心に」

目標: 「保育の観察記録」ありのままの状況を客観的に記録 ※1

#### ②2週目「第2巻 4歳を中心に」

目標: 「保育の実践記録」客観性を担保しつつ、記録者自身の感じたことや考えたことを加えた記録 ※2

#### ③3週目「第3巻 5歳を中心に」

目標: 「観察記録・実践記録」保育者になったつもりで書く具体的・詳細な記録

以上のように、1週ごとに段階的な目標を定め取り組んだ。この経験を重ねるうちに、「子どもの育ち」の視点については、次第に子どもの表情や言動から見えてくる心の内面を考えながら記録を取る姿が見られるようになった。また、「保育者の保育のあり方」の視点については、その言葉かけや援助に

どのような意図が含まれているかという点を考えながら留意点や配慮点を加えて書けるようになった。

### 3. 方 法

#### 1) 調査対象（2回の継続調査）

- ①平成29年度調査：  
子ども学部子ども学科1年生80名：平成29年度「保育内容総論」履修学生（最終講義時人数）
- ②平成30年度調査：  
子ども学部子ども学科2年生58名：平成30年度「幼稚園教育実習指導」履修学生

#### 2) 調査期間

- 平成30年1月～平成30年11月
- ①「観察記録・実践記録の取り方」指導の直後
- ②「幼稚園教育実習Ⅰ」終了直後

#### 3) 調査方法および調査内容

「観察記録・実践記録の取り方」指導の直後と「幼稚園教育実習Ⅰ」終了直後に、学生に対してアンケート調査用紙を配布し、回収した。内容としては「観察記録・実践記録の取り方」について、学生の意識がどのように変容したかを問うものであり、それぞれ複数回答を求める選択式の質問および自由記述を含む3項目から構成される質問紙とした。

#### 4) 分析方法

選択式の質問については、2回の結果をグラフ化し分析した。自由記述については、KJ法に準ずる方法で、挙げられていたものすべてを1つずつカードに記述し、それぞれの内容の共通するものをカテゴリーごとにまとめて整理した。

表1 記録の取り方の理解について

質問項目
項目1 環境構成・準備の大切さが理解できるようになった
項目2 保育者の援助やかかわりについて理解できるようになった
項目3 子どもの年齢や発達段階による個人差が理解できるようになった
項目4 より具体的・詳細に書けるようになった
項目5 書き方がわからない

### 4. 結果と考察

2回の調査共に、調査対象学生全員が回答し、有効回答率100%であった。

#### 1) 記録の取り方の理解について（表1）

質問項目1～5について授業後と実習後のそれぞれの割合を比較する。（図1）

項目1. の環境構成・準備の大切さが理解できるようになった、項目2. の保育者の援助やかかわりについて理解できるようになった、項目4. のより具体的・詳細に書けるようになったについては、いずれも授業後よりも実習後の方が高い値を示しており、保育現場において実際に経験することによる進歩がみられる。

それに対して、項目3. の子どもの年齢や発達段階による個人差が理解できるようになったについては、授業後より実習後の値が低いことがわかる。また、項目5. の書き方がわからないについては、実習後の方が「わからない」という割合が約14%も増えている。これは、授業で記録したものが、映像の中の子どもの姿や保育者のかかわりの姿であったことが原因ではないだろうか。実際の保育現場では、観察する対象は映像の向こう側にいるのではなくすぐそばにいて、保育者は実際に子どもの中に入っただけでなく、その表情や言葉、心の奥にある気持ちなど、気づいたことを記録としてまとめていく必要がある。そのため、年齢や発達段階による個人差まで理解することができず、書き方そのものが「わからない」という結果になったのではないかと推察される。

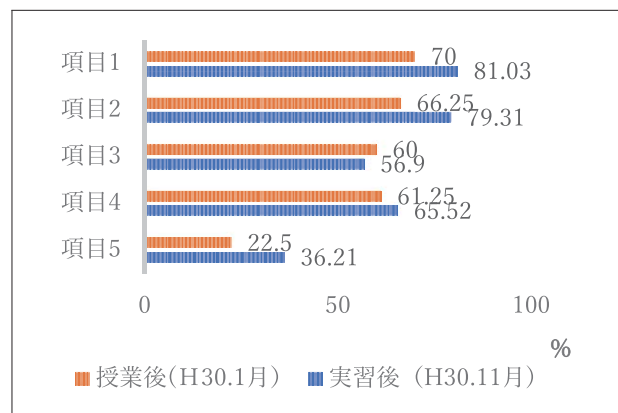


図1 記録の取り方の理解について

## 2) 学ぶ前と後の意識の変化（授業後）（表2）

観察記録・実践記録の取り方について、学ぶ前と後では学生の意識はどのように変化したのだろうか。記録を取る際の視点や配慮については、大きく3つにまとめられる。

まず1つ目は「子どもの姿を捉える」視点である。子ども同士、保育者とのかかわりというように、子どもがまわりにいる他者とどのようにかかわっているのかという視点で書くようになったことがわかる。

2つ目は「保育者の保育のあり方」の視点である。保育者として子どもを理解するという点では、まずは一人ひとりの表情や言葉にも配慮しながらその発

達を理解し、子どもの変化を見逃さないことが重要であるとしている。その上で、その時の状況や子どもに対する適切な言葉かけや環境づくり等の援助をする必要性についても気づいていることがわかる。

3つ目は「観察記録の書き方」の視点である。記録の重要性を把握した上で、簡潔でありながらも具体的・詳細な記録にすること、見やすくするための工夫として、定規を使用して図示することや記号を適切に使用すること、表現や言葉の使い方に配慮することなどが見られる。

その他に観察記録の取り方を学習することによって、観察する楽しさを知ることができた、以前より

表2 学ぶ前と後の意識の変化（授業後）

視点や配慮	カテゴリー	内容	人数	
子どもの姿を捉える	他者とのかかわり	子ども同士のかかわり	10	
		保育者とのかかわり	8	
保育者の保育のあり方	子ども理解	子どもを観察する視点を明確に	11	
		子どもの活動の意味の理解	5	
		子どもの発達理解	5	
		子どもの変化に気づく	2	
	援助	適切な援助	7	
		適切な言葉かけ	5	
	環境構成	子どもの活動が発展するような工夫	6	
		安全な環境構成	2	
	観察の視点		自分ならどうするかを考える	5
			保育者になりきる	2
細かい部分を見逃さない			2	
目に見えない部分を察する			2	
流れを予想して観る			1	
客観的な視点			1	
明確な視点			1	
視点が広がる	1			
観察記録の書き方	文章・表現	図示・記号の適切な使用	9	
		具体的・詳細に	3	
		見やすく丁寧に	2	
		簡潔に	2	
		定規を使用	2	
その他		言葉の使い方に配慮	1	
		記録の重要性	1	
		観察する楽しさ	1	
		自分の甘さを認識	1	
		より現場を知りたい	1	
		それなりに	1	

早く保育現場を経験したい気持ちになったというポジティブなものや、自分の考えの甘さを再確認したというような不安な気持ちも見られる。

### 3) 実習前と後の意識の変化 (実習後) (表3)

観察記録・実践記録の取り方について、実習前と後では学生の意識はどのように変化したのだろうか。記録を取る際の視点や配慮については、授業前後の変化と同様に大きく3つにまとめられる。

まず1つ目は「子どもの姿を捉える」視点であるが、人(子ども同士や保育者)とのかかわりだけではなく、子どもが身の回りの物や自然に主体的にかかわる姿を観察することによって環境とのかかわり

についての視点が広がったことがわかる。

2つ目は「保育者の保育のあり方」の視点であるが、保育の実践の中で、まずは子どもとしっかりとかわりながら一人ひとりの子どもを具体的に理解するよう努めることが重要であるとしている。特に、かかわる中で子どもの活動や言動の意味(何故なのか)を捉え、援助をする際には保育者自身の援助のねらいや理由、意図を明確にして援助すべきであるとしている。少数ではあるが、保育の1日の流れを把握し、活動の見通しを立てることが重要であることにも言及している。

3つ目は「観察記録の書き方」の視点であるが、簡潔・具体的・詳細に、適切な表現などの基本的な

表3 実習前と後の意識の変化 (実習後)

視点や配慮	カテゴリー	内容	人数	
子どもの姿を捉える	他者とのかかわり	子ども同士のかかわり	21	
		保育者とのかかわり	15	
	環境とのかかわり	物とのかかわり(遊具含む)	10	
		自然とのかかわり	8	
保育者の保育のあり方	子ども理解	活動の意味(何故なのか)を考える	5	
		一人ひとりとかわりながら具体的に	11	
	援助	援助の意図を考える	6	
		保育者の思いを理解する	2	
		細やかな配慮	2	
		ねらい・理由を考える	1	
		観察の視点	1日の流れの理解	2
	観察記録の書き方	文章・表現	活動の見通しを立てる	2
			明確な視点	1
具体的・詳細に			14	
ポイントを押さえ、簡潔に			6	
適切な表現			4	
第三者が見てわかるよう客観的に			2	
「～する」から「～のために～する」へ			2	
その他	文章・表現	丁寧に	1	
		読みやすい工夫を	1	
		図示・記号の適切な使用	1	
		メモを取る習慣	2	
		メモを取らず、記憶していたことのみ	2	
		座学と実践の違い	1	
		目的意識を持つ	1	
		子どもとかわる自信がついた	1	
		記録を取る難しさ	1	
		保育者の責任の再確認	1	

ことはもちろんであるが、中には第三者が見ても理解できるように客観的な記録を取るという、観察記録において最も重要な視点に気づいたものもある。

その他にメモを取る習慣が身についた、目的意識をもって臨む気持ちになった、子どもとかかわる自信がついた、保育者としての責任を再確認した、子どもとかかわりながらであるためメモが取れなかった、座学と実践の違いを知った、記録を取る難しさを知ったなども見られる。

#### 4) 記録を取る目的とは

(授業後) (表4)

(実習後) (表5)

記録を取る目的について、授業後・実習後の視点は項目的にはそれほど変わらない。共通する内容としては、保育者の立場で自らの保育の振り返りと改善を行うためには、記憶ではなく記録に留めることによって後日確認ができるため、記録を取ることが有効であるとしている。これは、子ども学部紀要第10号(2019)<sup>1)</sup>において筆者が示した、保育における「記録」と「評価」の関連性・重要性と合致していると考えられる。

また、保育者はこれまでの子どもの育ちに目を向け、発達段階や興味・関心など個人差を理解するた

めに記録を取る必要があるのではないかという記述が多い。その個人差を踏まえた上で、子どもの状況に応じた適切な援助の方向性を考え、環境構成を行うことが重要であると考えているようである。

さらに、保育者の「子ども理解」の視点においては「一人ひとりの」子どもという表現が非常に増えていることがわかる。特に実習後は、子どもと実際に接し、保育者のかかわりの姿を観察することによって一人ひとりの子どもの生活リズムの違いを理解し、それに対する保育者の対応についても学習している。また、この経験をとおして保育者同士の情報の共有と信頼関係の構築、さらには子どもの保護者との情報共有と信頼関係の構築という家庭との連携について言及している学生もいることは特筆すべきであろう。

## 5. おわりに

子ども学部紀要第10号の最後に、「子ども理解を促す観察記録・実践記録の取り方の指導」受講後の学生の学びの自己評価について検証することを今後の課題としていた。そこで本論文では、「授業後」から「実習後」まで継続して学生に対するアンケート調査を実施し、調査結果をもとにその意識の変容

表4 記録を取る目的 (授業後)

視点や配慮	カテゴリー	内容	人数
子どもの姿を捉える	個人差	発達段階	11
		興味・関心	6
保育者の保育のあり方	子ども理解	一人ひとりの子どもの変化に気づく	14
		子どもの発達理解	5
		一人ひとりの把握	4
	援助	一人ひとりの学びを知る	1
		援助の方向性を考える	6
		的確な対応	3
		環境構成	子どもが主体的に活動できる環境構成
その他		振り返りと改善	16
		保護者との連携	3
		保育者同士の連携	2
		1日の流れの把握	2
		計画の見直し	1
		観察力を高める	1
		指導案作成の基盤として	1
		堂々とした保育をするため	1

表5 記録を取る目的（実習後）

視点や配慮	カテゴリー	内容	人数
子どもの姿を捉える	個人差	発達段階	20
		生活リズム	8
		興味・関心	5
保育者の保育のあり方	子ども理解	子どもの発達理解	10
		一人ひとりの日々の変化に気づく	8
		一人ひとりの生活リズムの違いを知る	5
	援助	一人ひとりの行動や言動の意味を知る	4
		一人ひとりへの対応	15
		子どもと信頼関係を築く	6
その他	環境構成	適切な環境構成	8
		振り返りと改善	21
		後日確認できる	7
		職員間の情報共有と信頼関係の構築	4
		次に活かす	4
		保護者との情報共有と信頼関係の構築	3
		学びの文字化・具体化による成長へ	3
		残せる	2
		困った時の解決のため	2
		初心に帰る	1
		貴重な財産	1

について分析・検討を行った。

まず授業前と授業後と比較すると、3回に渡り映像を視聴して記録を取るというワークを行うことによって、ある程度子どもや保育者を観る目と書く力が育ったのではないだろうか。保育者にはそれぞれの子どもの状況を捉えた上で、環境構成も含めた適切な援助が必要であるということにも気づいているようである。

また、初めての幼稚園教育実習後の調査においては、子どもと実際にかかわり体験をとおして学ぶ中で、子どもや保育者を捉える視点がより広がり、記録にも成長が感じられる。特に、一人ひとりの子どもに対するというように「個と集団」のあり方にまで言及するケースも見られる。しかしながら一方で、記録を取る対象が映像の中にあるのではなく目の前にいて、かかわりながら記録を取ることの困難さに不安を感じている学生も少なくない。

今後は、さらに「子ども理解」を深めることができるよう、記録の形式についても時系列の記録だけでなく、個人記録やエピソード記録等を経験させる予定である。また、実習先からいただいた評価表

における学生の「記録」の評価についてもその内容を分析し、検証したいと考える。

### 参考文献

- 1) 櫻井京子：“幼稚園・保育所・こども園における記録と評価 - 「子ども理解」を促す観察記録の取り方の指導をとおして-”，第10号，pp.21-34（2019），（西九州大学子ども学部紀要）